

まちづくりのための若者連携ヒント集



《目次》

① はじめに	1
② 商店街と大学との連携事例	1
③ 商店街が大学と連携するためのアクションプログラム	8
④ 最後に	17

① はじめに

1. 連携ヒント集のねらい

近年、商店街が大学と連携し、商店街の活性化に様々な効果が生まれている事例が全国に見られます。

本書は商店街の振興、まちづくりに取り組む中で大学との連携を考えておられる方々に向けて、参考になるような手法やヒントを、商店街と大学の双方のメリットが両立している事例からまとめたものです。

2. 本書の構成

本書では、まず、街元気セミナーで取り上げる商店街と大学との連携事例を紹介します。連携のきっかけから活動に至る経緯、特に取組における商店街と大学双方のねらいとその効果・成果を中心にご紹介します。

その上で、商店街が大学と連携するためのアクションプログラムとして、連携するためのステップごとに、全国の事例からポイントを整理しています。

② 商店街と大学との連携事例

商店街と大学との連携について、今回セミナーを開催する地区の事例を紹介します。

《連携事例》

- セミナー事例 1 東京都品川区戸越銀座商店街と立正大学との連携
- セミナー事例 2 東京都品川区・目黒区西小山商店街と中央大学との連携
- セミナー事例 3 滋賀県彦根市花しょうぶ通り商店街と市内3大学との連携
- セミナー事例 4 茨城県つくば市北条商店街と筑波大学との連携

セミナー事例1：東京都品川区戸越銀座商店街と立正大学との連携

戸越銀座商店街（東京都品川区）では、立正大学経営学部との連携により「コロッケによるまちづくり」を進めています。連携をはじめて1年半ですが、商店街の新名物「戸越銀座コロッケ」を生み出し、全国的に知名度も高まっています。

（戸越銀座ブランド）

戸越銀座商店街では、商店街への集客を狙い、フリーマーケットの開催や商品券の配布などに取り組んできた中で、“集客はあっても個店の売り上げにはつながらない”という状況が続きました。そこで、「商店街の中で顧客が欲しがらるものをつくる必要がある」という考えから『戸越銀座ブランド』に向けた取組がスタートし、1996年に第一号商品として日本酒を販売して以来、ソースやお菓子などのブランド商品が生み出されました。立正大学との連携による『戸越銀座コロッケ』によるまちづくりの取組は、そのような商店街の活動を背景にして2008年から始まったものです。

（コロッケのまちづくり）

学生との連携の取組は、戸越銀座を「コロッケのまち」として売り出すというものです。従来から精肉店や惣菜店などで売られていた「コロッケ」を、戸越銀座の定番の土産にすることをねらい、名称を『戸越銀座コロッケ』に統一し、さらに7店舗で取扱う『戸越銀座コロッケ』を1つに詰めて持ち歩ける『コロッケ用ギフトボックス』の作成に取り組みました。作成にあたっては、学生が箱のデザインを考えるとともに、学生自身がパッケージ印刷の業者との交渉も行っています。さらに、コロッケ販売店のマップや幟（のぼり）を作成、月に一度開かれる「銀六祭」では学生による手づくりコロッケの製作・販売も実施しています。学生は、企画からチラシの制作、コロッケの材料仕入れ、調理、販売、マスコットによるプロモーションまでの一連のプロセスに関わっています。また、各コロッケ販売店のプロモーションビデオを作成し、各店舗のPRや「コロッケのまち」のプロモーションに活用しています。

（連携が取組に付加価値をもたらす）

商店街が立正大学と連携した最大の成果は宣伝効果（プロモーション）です。学生との協同プロジェクトであるという新鮮味から、メディアにも度々取り上げられています。学生が主体の取組によって、商店街のコロッケ販売店だけでなく、商店街全体への注目度が高まるとともに、メディアに取り上げられたことによる外部からの評価は、商店主各々が地域を考えるきっかけにもなりはじめています。また、活動を担う学生のモチベーションを高めることにもつながっています。

（商店街、大学双方のメリットが実現）

調査、イベント、PRなど商店街と学生とのタッグによるこの取組は、大学・学生にとってはダイナミックな現場の姿を学ぶまたとない機会となり、一方、商店街にとっては新たな「戸越銀座ブランド」の確立とともに集客につながり、双方のメリットが見事に実現している取組です。



戸越銀座ブランド商品
日本酒



戸越銀座コロッケ
食べ歩きマップ



戸越銀座コロッケ用
ギフトボックス



銀六祭での学生による
手づくりコロッケの販売

セミナー事例 2：東京都品川区・目黒区西小山商店街と中央大学との連携

品川区と目黒区にまたがる西小山商店街は、これまで駅の両側が鉄道で分断されていたために、合同での取組はほとんどありませんでしたが、2008 年 4 月、鉄道の地下化を契機に区をまたいだまちづくりを考える「にぎわい再生プロジェクト研究会」を商店街関係者、地元住民、行政、鉄道事業者、大学、専門学校等により立ち上げました。その中で顧問として参加した中央大学教授との関係から学生と商店街の連携がはじまりました。

学生の企画・運営による商店街の活性化を考える「ワークショップ」の開催、及び地域一体でのイベント「ミステリーツアー（謎解きをしながら街歩きを楽しむウォーキングイベント）」を実施しています。

（地域でのワークショップ（勉強会）から始まった連携）

「にぎわい再生プロジェクト研究会」の中で実施したワークショップは、「駅の両側の人々が、話し合いによって共通の認識を持って、問題に取り組むことができる土台をつくること」を目的とした、地域の人々と学生との勉強会です。2009 年 4 月からはじまり、計 3 回のワークショップで、学生が西小山商店街の「強み・弱み」を分析し、地域住民と意見交換を行いました。商店主や地域住民にとって興味ある内容の話し合いからはじめたことが地域住民の積極的な参加につながり、学生からの時に遠慮の無い率直な発言も、まちづくりへの貴重な意見として受け入れることのできる関係が、地域住民と学生の間に築かれました。

（ミステリーツアーの実施）

地域一体でのまちづくりのきっかけとするべく、「にぎわい再生プロジェクト研究会」での研究成果を踏まえ、2009 年 6 月、参加者にまちを歩いて謎解きをしてもらう「ミステリーツアー」を開催しました。ここで大活躍したのが、まちづくりを一緒に考えてきた学生です。まちの案内役として商店街の各所に張り付き、地域の魅力をお客さんに伝える役を担いました。また、案内役の衣装デザインは近隣のドレスメーカー学院（服飾専門学校）が行いました。参加した学生は、地域の魅力を改めて知ったという感想を寄せています。学生が熱心に取り組んだ姿を見て商店街や地域住民も学生に対する印象を変え、その後の懇親会などで地域住民と学生との信頼関係が少しずつ構築されていきました。

なお、イベント参加者は 1,700 名、その内 6 割の人が商店街で買い物を楽しんだ、また来たいという声を寄せるなど、これまでできなかった新たなイベントにより集客・売り上げ効果も上がっています。

（地域づくりの取組が加速）

西小山地域一体でののはじめての取組に対して商店街も達成感を得て、地域では早速、来年度のミステリーツアーの開催の検討に入っています。また、研究会の企画戦略チームにやる気のある人々が集まり、西小山地域全体のマップ作成にとりかかっています。



ワークショップの様子



ミステリーツアーパンフレット



ミステリーツアーの様子

セミナー事例3：滋賀県彦根市花しょうぶ通り商店街と市内3大学との連携

城下町として発達した彦根市中心市街地には11の商店街が立地します。観光地としては、夢京橋キャッスルロードや四番町スクエアといった街並み整備型の商店街が有名ですが、中心市街地から少し外れた東端に位置し、近隣商業型の小さな商店街ともいえる花しょうぶ通り商店街では、身の丈にあった方法で商店街活性化に向けた取組をしようと、大学教授や学生と連携した様々な取組が10年にもわたり進められています。

（商店街と学生）

1949年それまでの彦根高等商業学校から新制国立大学として滋賀大学が発足しました。1980年代までは、商店街で石を投げると滋賀大生に当たるというぐらい、学生で賑わっていました。しかしながら、道路拡幅等による学生下宿の閉鎖や流通業界やライフスタイルの変化により、彦根のまちなかから学生の姿が次第に見られなくなってきました。

1998年10月から滋賀県立大学の自主サークルACT（Action Connect with Town）は、銀座商店街などの4つの商店街が交差する「久左の辻」の空き店舗のシャッターをあけることから始めました。この拠点を利用してセミナーやライブ、学生によるファッションショーなどのイベントが繰り広げられました。しかし、ビル所有者の転売等により、現在は、使用不可能となっています。

（日仏景観会議と地域資源の見直し）

2003年9月滋賀大学の教授が赴任と同時に誘致してきた「日仏景観会議彦根」の開催がこれまでの「観光＝彦根城」としか認識されていなかった中心市街地にある様々な歴史・文化資源を掘り起こすきっかけとなりました。

この地域資源などのコンテンツや実際まちを巡るイベントなどを一過性のものとしたくない思いから、翌年には、「NPO法人彦根景観フォーラム」が設立されました。滋賀大学産業共同研究センターに事務局を配置し、「彦根を世界遺産に登録しよう」をテーマに大学、学生、商店街、行政、経済団体、市民などの多彩な構成で持続可能な組織として運営されています。また、このコンテンツを彦根の新しい観光に結び付けようと、滋賀大学と連携して中心市街地におけるユビキタスシステムの導入に向けた取り組み（携帯電話とQRコードを活用した学習型観光「ひこねまち遊びケータイ」の実施）を行っています。

（大学と連携した「ふるあたらしい街」づくりの実践）

花しょうぶ通り商店街では、1997年に滋賀県立大学と商店街でのまちづくりの検討を行うワークショップから「ふるあたらしい街」のコンセプトを打ち出しました。その後学生と町衆により、花しょうぶ通りをモチーフにした大壁画を共同作業により描きました。1999年には、国の認定によるファサード整備事業をいち早く行い町屋風に各店舗の外観をリニューアルしました。近年では、「戦国」をテーマに天下分け目の関が原の合戦に擬えて、通りを隔てて西軍・東軍の戦国武将の幟（のぼり）旗を店頭に掲げるなどの商店街づくりにつながっています。



久左の辻でのファッションショー



花しょうぶ通り商店街の様子



QRコード



花しょうぶ通り商店街の各店舗までに掲げられた幟（のぼり）

※滋賀県立大学の学生が発案。歴史的な重みを継承しつつ今日的なニーズに対応する商店街、空間を持つ街が「ふるあたらしい」という言葉に凝縮されています。

(花しょうぶまつりからアートフェスタ勝負市へ)

花しょうぶ通り商店街は、ファサード整備事業をきっかけに毎月第2土曜日に開催するナイトバザール「100円で買える幸せ」を開催するとともに花しょうぶの咲く時期6月に花しょうぶまつりを開催しました。このときにACTの学生も参画していましたが、1商店街のイベントでなく、広域にするため、市内の3大学（滋賀大学・滋賀県立大学・聖泉大学）大学祭メンバー約100人と商店主、商店街連盟、商工会議所などの関係機関が実行委員会に参加し、「アートフェスタ勝負市」として企画・立案・実行しています。この実行委員長には、滋賀大学教授が就任し、公正中立的な立場から関係各機関の協力を得ています。毎年100グループ以上の陶芸等のものづくり作家による展示販売やライブを行い、10回目を迎えた2009年には10,000人の集客を挙げるまでになっています。

(LLP（有限責任事業組合）による「街の駅」の運営)

当初花しょうぶ通り商店街で運営をしていた「寺子屋力石」は、駄菓子屋からレコードショップへの変遷後、活用に関り、滋賀大学教授へ相談をしました。商店街やまちの持続可能な組織として、商店主だけでなく、大学関係者、NPO、商工会議所、行政等の地域内外の人も加わった新しい組織LLP（有限責任事業組合）「ひこね街の駅」を立ち上げました。LLPでは、250年前に寺子屋として使われていた空き店舗を使って、現代版寺子屋、すなわち学びの場として利用するためにひこね街の駅「寺子屋力石」を運営しています。現在は、商店街版チャレンジショップの「カフェルワム」やNPO法人彦根景観フォーラム主催の「談話室それぞれの彦根物語」では、滋賀大学・滋賀県立大学の教員や学生、市民、公務員、経済人といった多様な人たちが講師になったり、参加したりする勉強会を開催しています。

2006年からは、滋賀大学、滋賀県立大学の街なか研究室として教授や学生の研究発表や活動の拠点として使われています。他に学生が先生になって子供たちに勉強を教える「学舎」、陶芸教室など多彩なメニューが催されています。また、安全安心を考え、木造伝統工法による耐震改修をNPO・学生・商店主・市民・公務員などのボランティアで実施しました。

また、LLPでは、「ひこにゃん」に続く地元キャラクター「しまさこにゃん」や「いしだみつにゃん」を誕生させ、銭湯跡を改装した第2街の駅「戦国丸」での地元キャラクターや戦国グッズの販売や手作り甲冑教室が好評を得ています。大学のもつ科学的な分析力や専門知識、直感力がLLPによる様々な活動を支えています。

(花しょうぶ通りから彦根市中心市街地へと義の連携が発展)

花しょうぶ通り商店街での取組は、徐々に他の商店街へも広がっています。隣接するリバーサイド橋本商店街では、商店街の空き店舗活用として、「いこう館」を地域交流施設として開設し、県立大学の学生から栄養バランスを考えた昼食を地域の高齢者などに提供している「学生さんの食堂」や毎月10日に開催する「橋の市」などの催しが企画されています。



アートフェスタ勝負市



街の駅「寺子屋力石」



第2街の駅「戦国丸」



リバーサイド橋本商店街の地域交流の場「いこう館」での「学生さんの食堂」

セミナー事例 4：茨城県つくば市北条商店街と筑波大学との連携

つくば市北条地区は、筑波山への登山口であり、在郷商人街として栄えたまちです。約 90 店舗の商店が立ち並び、蔵造りの建物が点在するなど風情あるたたずまいが残っている地区です。当地区は、昭和 50 年代までは商店数も横ばいで推移していましたが、その後つくば研究学園地区への大規模商業施設の進出や事業者の高齢化、後継者問題等により、商店数の減少に直面していました。

2005 年 8 月のつくばエクスプレスの開業を契機に、筑波山等への観光客、来街者が増加したのに加え、筑波大学との交流の場への参加をきっかけに、大学研究室や意欲ある学生、地域住民と連携し、地域資源を活用したまちづくりを展開しています。

（筑波大学と北条商店街との連携のきっかけ）

北条商店会では、2005 年からつくば市とつくば市商工会が主催するワーキンググループ活動に参加し、商店街の活性化について検討を重ねてきました。この活動には筑波大学国際学類の大学院生有志が途中より参加し、北条のまちづくりに関する具体的な検討が始まりました。

2007 年度からは、筑波大学大学院人間総合科学研究科の建築デザインの教授による授業「ADP（Art Design Produce）」で、北条を題材にした授業が始まり、他方、筑波大学国際総合学類を中心とする「国際チーム」では多くのメンバーを募りワーキンググループ会議への参画が進んでいました。この時期、茨城県のがんばる商店街支援事業への申請を契機に、北条の活性化計画として「店蔵岩崎屋の改修」、「北条市の復活」、「ガイドマップの作成」が提案され、大学、学生、商店や地元住民が連携したまちづくりの取組がスタートしました。

（新たなまちづくり組織「北条街づくり振興会」の立ち上げ）

これまで北条商店街では、商店会としての販促活動とまちづくり活動の 2 つを進めてきましたが、商業者によるまちづくり活動は人数が限られ、また地域からの協力にも限界がありました。筑波大学との連携をより強固にするため、また、まちづくりには地域住民の参加が不可欠であるとの考えから、新たなまちづくり組織設立の必要性が検討されました。

新たなまちづくり組織では、大学研究室の活動や学生有志の活動により、地域に埋もれた資源を再発見し、それを活用できるように磨き上げること、そして、商店会をはじめとする地元が、それらを日常化につなげるという役割が整理されました。

2007 年 9 月、商店会関係者、地域住民、大学教員、学生等、約 130 名の会員による「北条街づくり振興会」が設立され、地域に関わる人々が様々なかたちで参加できる、まちづくり活動の基盤ができてきました。

（店蔵岩崎屋と北条市（朝市）の復活、地域紙の発行）

北条の商店街には、店蔵をはじめとする古くからの建物が多くあります。明治初期に建築され、保存されていた店蔵「岩崎屋」を、所有者との話し合いにより借り受け、地域活性化の拠点として改装しました。店蔵利用の交渉は、街づくり振興会の商店会関係者が実施。店蔵改装は、「ADP」の学生の手により進められ、拠点内のカフェ運営は「国際チーム」と地域住民が共同で行っています。若い学生や大学研究室が入ることにより、商店街だけでは進めにくかった取組に対して、地域理解を得ることにもつながっています。

北条郷ワーキンググループ

ADP
建築系研究室
の授業

国際チーム
学生有志

情報発信基地の立ち上げ企画

- ・店蔵 岩崎屋の改修
- ・北条市の復活
- ・ガイドマップの作成



新たな組織 「北条街づくり振興会」設立

＜役割分担＞

大学研究室・学生有志

⇒地域に埋もれた資源を再発見し、それを活用できるように磨き上げる

商店会・地元

⇒上記を日常化につなげる

新たな組織体制の中で下記を実現

- ・店蔵 岩崎屋の改修
- ・北条市の復活
- ・ガイドマップの作成 など

2007 年度の活動の流れ

（大学・学生からの企画提案と、誰でも参加できる新たなまちづくり組織の設立）



北条ふれあい館岩崎屋
（大学研究室、学生有志、地元が連携し、店蔵を情報発信基地として復活）

情報発信基地「北条ふれあい館岩崎屋」の整備とともに、かつての朝市「北条市」を復活し、ここでも筑波大学の学生の感性や機動力を活かして、会場の設置や、出店店舗の「屋台・商品棚」のデザイン・製作、グッズの作成など、運営・管理に至るまで、地元住民と学生が連携しながら実施しています。

また、地域と学生との交流のツールとして、北条のまちの状況を整理した「北條町ものがたり（まちなみマップ等を掲載）」や「月刊北条（現在は北條町ものがたり）」を発行しています。学生が地域取材し、その情報を発信することにより、地域と学生の結び付きが強まっています。

（北条米スクリームの開発、大蔵改修、地域通貨「マイルス」社会実験）

「北条ふれあい館岩崎屋」オープン翌年、2008年11月、北条街づくり振興会では、地元の筑波北条米を活用したまちおこしのための新商品「北条米スクリーム」を開発しました。「北条米スクリーム」は、「チームごじゃっぺ（国際チームを改名）」の学生のアイデアで作ったものを製品化したアイスクリームです。地元のブランド米「筑波北条米」を加工したもので、製造は(株)美野里ふるさと食品公社に委託しています。現在「北条ふれあい館岩崎屋」と商店会内の協力店で販売しています。商品化には学生が主体となって試行錯誤を繰り返しながら、数ヶ月かけて取り組みました。製造に手間がかかるため生産量は限られていますが、予想以上の反響を得ています。

またこの年、「北条ふれあい館岩崎屋」に続き、「ADP」と「チームごじゃっぺ」との連携により、商店街にある江戸時代末期に建てられた穀物蔵を「宮清大蔵」として改修し、2008年11月に音楽コンサート「大蔵秋の音楽祭」を開催しました。さらに、このときに音楽関係者に高い評価を受けたことで、2009年2月にはウィーンフィルのメンバーによるサロンコンサートが実現しました。現在、ADPでは「チームふるいや」として、元ふるいの製造販売所であった町屋を改修し、北条の子供達とのワークショップを重ねるなど、地域住民に開かれた場所づくりに取り組んでいます。

また、大学院生の研究の一環として、地域内のコミュニティツールとして地域通貨の導入も検討され、2008年1月から3月にかけて地域通貨「マイルス」の社会実験が行われるなど、地域と学生が連携した取組が広がっています。

（まちづくりの取組から新規出店につながる）

店蔵岩崎屋、宮清大蔵の復活、様々なかたちでのまちの情報発信など、地域と学生との取組が少しずつ広がり、商店街の活気を取り戻したことで、2008年、商店街に数十年ぶりに喫茶店が新規オープンしました。

（大学内の他学部との連携へ発展）

2009年11月には、前年に引き続き「大蔵秋の音楽祭」の開催、さらには芸術専攻の研究室との連携により、商店街内の裏堀のLEDによるライトアップ（光流 ライトアート展）を実施しました。北条のまちづくりを開始して3年、他学部との連携の輪も広がっています。



北条市
（かつての朝市を再現。季節ごとの地元農産物や加工品を販売）



北條町ものがたり（まちなみマップ）



北条米スクリーム
（学生のプロデュースによる商品化）



宮清大蔵におけるウィーンフィル・サロンコンサート



地域通貨「マイルス」の社会実験
（地域貢献を物やサービスと交換する地域通貨）

③ 商店街が大学と連携するためのアクションプログラム

商店街が大学と連携するにあたって、どのような行動を起こすことが必要でしょうか。具体的な事例を交えて、ステップごとにヒントを紹介します。

《連携のSTEP》

- STEP 1 商店街が大学と連携する効果を理解する > 8 頁
- STEP 2 大学のねらいを理解する > 12 頁
- STEP 3 連携する大学を探す、大学へアプローチする > 13 頁
- STEP 4 商店街と大学・学生との良好な関係をつくる > 14 頁
- STEP 5 大学・学生との連携から地域（商店街）の
自立的な活動へつなげるために工夫する > 16 頁

STEP 1 商店街が大学と連携する効果を理解する

商店街と大学との連携を考えるにあたり、まずはどのような目的でどのようなことを期待するかを整理することが必要です。例えば、「これまで取り組んできた活性化の方法を検証したい」、「商店街活性化のアイデアが欲しい」、「商店街のPRをしたい」、「イベント実施を手伝って欲しい」、「新たな商品を開発したい」、「新たな業態開拓を図りたい」など、商店街だけではできなかったことに対する期待が事例からもうかがえます。

これまでに実施されている商店街と大学との連携事例においてどのような効果が上がっているのかを参考にしてください。

【特産品の開発】

●事例1：神奈川県横須賀市追浜商盛会－関東学院大学

横須賀市追浜商盛会では関東学院大学との連携により商店街のワイナリーで「横須賀おっぱまワイン」を誕生させました。

「具体的な研究フィールドを街なかに設けて研究を行いたい」という意向をもっていた関東学院大学社会環境システム学科の教授と、「大学と連携を行うにあっては、地元の大学と連携したい」と考えていた追浜商盛会は、1年間を通じて街なかで授業を行う「街なか研究室」に取り組み、この取組の発表会の中で大学から『ワイナリー』の提案がなされました。地元にある研究機関の海洋研究開発機構が採取する海洋深層水に着目、「海洋深層水を活用した商店街ワイナリー」として、2005年に商店街がワイナリー整備とワイン醸造を行うことになりました。

取組の特徴として、商店街でワインを醸造する例がこれまでなかったことという先進性と、ワインを売ること、商店街と大学との連携を継続するための活動資金（収益）を確保する仕組みをつくったことです。

『横須賀おっぱまワイン』は、市民をはじめ好評を得て、横須賀海軍カレーに続く特産品になっています。



商店街の空き店舗を活用した
大学の街なか研究室も兼ねた
「追浜こみゆに亭&ワイナリー」



商店街発のワイン
「横須賀おっぱまワイン」

●事例2：北海道室蘭市輪西地区－室蘭工業大学

「鉄の街」として栄えた室蘭市では 1975 年頃より鉄鋼業が衰退し、鉄鋼関連企業の合理化が進みました。これに伴い人口及び商業機能の流出が続き、商店街をはじめとする輪西地区では空洞化の進行が著しくなりました。そこで「鉄」を見直し「鉄と人との身近な関係」を作るために、輪西地区の商業者を中心に、室蘭工業大学教員、市役所職員、民間企業に勤める市民などで「てつのまちプロジェクト」を立ち上げました。

「てつのまちプロジェクト」では、「鉄のアート、デザイン事業」や「市民等が鉄と触れ合うことを目的とした鉄の体験事業」「アイアンフェスタ等のイベント事業」等を行っています。特に、「鉄のアート、デザイン事業」では、室蘭工業大学の学生がボルトを使った人形「ボルタ」のデザイン・開発を行っています。現在、ボルト人形「ボルタ」は地域商品として特産品化しているとともに、地区内に「ボルタ工房」を設置し、ものづくり人材の雇用創出につながっています。



学生がデザインしたボルト人形「ボルタ」



工房で「ボルタ」を制作する職人

【新たなイベントの開催】

●事例3：兵庫県尼崎市三和本通り商店街－関西大学

尼崎市中心市街地商店街では 2004 年から関西の 5 大学との連携を実施しています。その中でも三和本通り商店街では、関西大学の学生達が、「母の日」「父の日」「敬老の日」「ハロウィン」「秋の味覚祭」「節分イベント」などの季節イベントを企画し、これらイベントを学生が主体的に実施してきました。また、これらイベントの開催が商業者に意識の変化をもたらし、これまで不定期に行っていた商店街独自のイベント「三和市」を毎月第 3 土曜日に定例開催することにつながっています。このように、大学との連携による各種イベント開催は、商店街に「なにかせなあかん！」という活気を生みしました。



仮装した学生が商店街を盛り上げる「ハロウィン」

●事例4：京都府京都市伏見区竜馬通り商店街－龍谷大学

竜馬通り商店街と龍谷大学経済学部教授・学生は、2001 年より数年間に渡り、商店街での来街者調査、学生による商店主への IT 出前講座、商店街の空き店舗を活用した学生運営による店舗経営を実施してきました。その後の新たな展開として考えたのが、学生を介した農商連携であり、商店街と宇治茶の生産地である南山城村の農家とのタイアップによる「やましろ農産物直売市」の開催です。学生は生産者への出店依頼を行うとともに、商店街の各個店とタッグを組み南山城村の食材を用いた「一店逸品」づくりにも取り組み、直売市での販売を実施しました。

財政難・高齢化に直面する農村と、生鮮食料品店の減少に悩む京都市内の商店街とをつないで直売市を開催することにより、大学を媒介にした地域同士の連携が実現しました。消費者の顔が見える農産物の新たな販路づくり、生産者の顔が見える商店街づくりを目指しています。



やましろ農産物直売市の開催

【空き店舗の活用】

●事例5：山形県上山市日町商店街－東北芸術工科大学

山形県上山市の中心部及び十日町商店街では商店街の若手商業者と市民、大学とが連携した取組が行われています。2007年から東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科の教員・学生が中心市街地の調査、提案をすることからはじまった取組は、武家屋敷の庭にある四阿（あずまや）の柿渋塗り替えへの学生の参加や、学生の課題を展示するストリートギャラリーの開催につながりました。また、“温泉客が立ち寄る場所をつくること”、“果物が豊富な地域の特徴を活かすこと”を目的に、2009年には中心部の十日町商店街にあった空き店舗を改装して学生が「長屋門ギャラリー兼ミニ・フルーツパーラー」をオープンしました。

上山市、まちづくりセンター、まちづくり塾、地元建築家、大工、商店街、そして農家の人々との協働作業により立ち上げたギャラリーでは学生の作品を中心とした展示を行い、上山の農家が提供する果物をその場で食べることができることから、「ミニ・フルーツパーラー」とも称しています。商・学・農・市民・行政の連携の成果であり、近くにあるまちづくりセンターがそれを支えています。



長屋門改装時



オープニングセレモニーの後、
フルーツパーラーにて



ギャラリーでの展示

●事例6：山口県山口市西門前商店街－山口県立大学

山口市西門前商店街では、山口県立大学で服飾デザインを学ぶ学生と協働で、空き店舗を活用して、地元アパレル企業と提携したファッションイベントの開催や受注生産衣料品のプロデュースを行う会社運営を行っています。

山口県立大学生活文化学研究室の教授と県の企画立案を担当する職員との出会いをきっかけに、県が商店街に研究室を設置することを山口県立大学に提案したことが発端となり、1999年に商店街の空き店舗を活用して、2階に服飾デザイン研究室、1階には学生が制作した洋服やアクセサリを販売する文化発信ショップ「Naru Naxeve（ナルナセバ）」をオープンしました。商店街でのサテライト研究室の事業実施にあっては、3年間の県による支援終了後に閉店しましたが、それまでの成果を活かし、新しいビジネスの拠点となる有限会社「ナルナセバ」を学生たちが創業。商店街の他の空き店舗に事務所を移し、新たな事業展開を図っています。



文化発信ショップ「Naru
Naxeve（ナルナセバ）」



学生による商店への突撃取材

【商店街としての情報発信】

●事例7：福岡県飯塚市本町商店街他－近畿大学九州短期大学

市内に3つの大学があり、合計7千人の学生がいる飯塚市ですが、各大学が中心市街地から離れていることもあって、中心市街地に来ないまま学生生活を終えてしまう学生が多いという状況でした。そこで、中心市街地の本町商店街では、学生を町に呼び込もうと、商店街で空き店舗を借りて「街なか研究室」を設け、近畿大学産業理工学部・近畿大学九州短期大学のゼミを行っています。その取組の1つとして、近畿大学九州短期大学によるインターネット放送局「おしゃべり放送局」の取組があります。

学生が商店主に突撃インタビューを行い、インターネットを介して動画放映を行うもので、リアルタイム放送にも取り組むなど、商店街の情報発信を行っています。近年では、飯塚市の歴史や観光名所に関する知識を問う「飯塚検定」を考案したり、無料情報誌「WAO! WAO!」を創刊したりして、飯塚の良さ、商店街の良さをPRする活動を学生が行い、商店街の情報発信に一役買っています。



学生考案の「飯塚検定」

●事例8：奈良県生駒市中心市街地－奈良女子大学

生駒市の中心市街地では、2003年より奈良女子大学の大学院生・学生が企画・取材・編集を担当するミニコミ誌「ひょうたんからいこま!」を発刊し、中心市街地商店街の情報発信を行っています。

学生によるミニコミ誌の誌上企画や取材を通じて、希薄化していた商店街内部や商店街連合会に属する他商店街同士のつながりや話し合いの機会が増えたこと、ミニコミ誌により商業者が商店街を「まち」として捉え、興味を持つようになったこと、従来から実施してきたイベント等の販促活動にも活気が生まれたことなど、様々な効果を生み出しています。



ミニコミ誌「ひょうたんからいこま!」

【大学の専門性を活かした事業展開】

●事例9：滋賀県彦根市花しょうぶ通り商店街－滋賀県立大学

「寺子屋力石」は、江戸時代から明治にかけて寺子屋として利用された築250年と言われている歴史ある建物でしたが、長年の劣化と改装により耐震的に大きな問題を含んでいました。そのため、建築家である滋賀県立大学の教授が、街なかゼミとして活動拠点にしている「寺子屋力石」の改修の検討をはじめました。

彦根には古い町屋が多く残されていることもあり、その古民家再生のモデル的な事業として、2007年に木造伝統工法による耐震改修工事を、学生、市民等100人のボランティアにより1ヶ月間かけて行いました。

大学の専門性、ノウハウがあつてこそ、商店街の地域資源の維持・活用ができた事業であると言えます。



学生も参加した耐震改修工事の様子

●事例10：長野県須坂市中心市街地－信州大学

製造業のまちとして知られる須坂市では、2002年に信州大学と須坂市との研究連携センターが須坂市中心市街地に開設されたことを契機に、信州大学工学部が持つ技術を活かした地域振興を図ろうと議論が始まりました。その成果の一つとして、信州大学工学部教授からバッテリーとキャパシタによる電源のハイブリッド供給の可能性の示唆を受け、地元のものづくり事業者が連携して、「ハイブリッド電動三輪車」を開発しました。

開発した「ハイブリッド電動三輪車」を中心市街地の活性化に活かそうと、中心市街地商店街の有志等が、商工会議所やNPOと連携を図り、街並みを周遊する散策観光コースを特定し、ここで「ハイブリッド電動三輪車」の走行実験を始めます。この活動によって、まちの知名度が上がり県外客が訪れるなど、須坂の観光産業の振興、中心市街地活性化につながっています。



開発したハイブリッド電動三輪車



ハイブリッド電動三輪車による街並み周遊観光の様子

【学生が実施することで取組に付加価値がつく！学生の意見が行動の後押しになる！】

商店街が学生と連携した結果、多くの地域で広報宣伝効果が生まれています。学生と連携することの話題性から、メディアの取り上げ方が変わり、掲載量が増え、また掲載頻度が高まります。さらに、マスコミで取り上げられることにより、学生の提案が実現された例もあります。尼崎市中心市街地での取組の一つとして、甲子園大学が商店街の通行量調査に基づき自転車の無謀な通行や迷惑駐輪の解決策を提言しましたが、マスコミに取り上げられたことにより、長年の懸案であった自転車の問題に、住民・行政・警察が動き、TMO 尼崎による歩道上への駐輪機設置事業として実現しました。

STEP 2 大学のねらいを理解する

大学・学生が、“なぜ商店街と連携したいのか”“連携によるメリット”について理解することも必要です。学生はイベントを行う際の使い勝手の良い安い人材なのでは決してありません。近年、大学は実践的な教育プログラムづくりと、それによる人材育成を、特に地域との関係づくりや地域貢献の視点から進めようとしています。大学としては研究フィールドとして商店街と連携するという目的があります。

【実地教育、実地研究への志向性と、実地の場としての商店街の魅力】

商店街と連携をする大学の教授のねらいとして次のような内容が聞かれます。実地教育、実地研究の場として、商店街は、大学のあらゆる分野（理工系、デザイン系、文系、福祉・医療系など）にとって、魅力のある場所なのです。

●事例11：商店街でマーケティングを学ぶ（立正大学経営学部）

「机上だけでなく実践活動を通じてマーケティングを学ぶ」という教授の方針により戸越銀座商店街でのコロッケによるまちづくりが実施されています。商圈調査や歩行者通行量調査、調査結果を踏まえた「コロッケのまち」の計画作り、それに続くマップの作成やイベントの実施、PR活動を実施することで、マーケティングを一貫して学ぶことができます。また、学生は商店街の人とのコラボレーションの中で、机上では知ることのできないマーケティングを実践で学ぶこともできます。

●事例12：まちづくりの現場を体感する（中央大学総合政策学部）

西小山商店街での取組は、まちづくり・政策を学ぶ学生との連携です。学生がまちづくりの現場に関わることの楽しみ、人と人との信頼関係の重要性を学ぶにあたり、商店街は非常に教育的な魅力のある場所でした。西小山商店街でのワークショップは、地域の現状について統計データやフィールド調査により、まちの強み・弱みの把握を行い、現状を明るみに出すという調査手法を実践する機会であると同時に、商店街・地域住民と本音で話し合うことによりまちづくりの方策を共に考え、イベントを実施し、まちづくりを体感する場となっています。次第に取組への賛同者が増加するなど、ダイナミックに活動が展開する様子を体感することは、机上では決して知ることのできないものです。

●事例13：商店街は学生の現場体験（滋賀大学産業共同研究センター）

滋賀大学産業共同研究センターでは、「コミュニティの脱構築」を研究テーマとして、学生と市民が共にフィールドワークをし、「時間のなかの彦根中心商店街」、「未来の彦根中心商店街」などについて議論し、現実社会のなかでの経済学の価値・役割を、身をもって体験しています。特に「ひこね駅の駅」は、「クラフト」（商店街）「サイエンス」（大学）「アート」（NPO）の結合に相当することやイノベーターとオピニオン・リーダーが16%を超えると物事が普及する理論などの科学的な分析を学生が報告しています。地域と大学のあり方についても改めて認識できるきっかけとなっています。

【大学における地域貢献】

●「教育」「研究」とあわせて「地域貢献」が求められています。

商店街、中心市街地をはじめ、地域の活性化にあっては、「地域の担い手づくり」が重要であり、地域の知識・人材が集積する大学等は、その担い手として期待されています。しかし、担い手として連携したくても、これまでの大学の使命は「教育」と「研究」が中心であり、商店街にとって「大学は相談しようにも敷居が高い存在」という声を良く聞いたものです。

しかし、少子化や大学全入時代の到来から、大学は、地域貢献・地域連携により、今まで以上に存在意義を明確にし、内外にアピールしていくことも求められるようになってきています。また、大学との連携というと、技術移転や技術共同開発といった理工系の分野での取組がこれまでは多く見られましたが、近年、経済などの文科系やデザイン系といった学部でも地域貢献としてまちづくりにかわる事例が増えつつあります。その他、福祉や医療系を含め、実践教育の場、社会教育の場として、とりわけ商店街での実践を望む声が増えています。

STEP 3 連携する大学を探す、大学へアプローチする

「大学の敷居が高く感じる」「大学に何を相談すればよいか分からない」「大学の誰に相談すればよいか分からない」といったことを感じていらっしゃる商店街が多いのではないのでしょうか。

STEP 2で挙げたように、実地教育、研究の場として“商店街”を求めている大学が多いのが現状です。まちづくりの実践の場、社会教育の実践の場として“商店街”は非常に魅力ある場所なのです。

●事例 14：大学・学生との交流イベントで出会った大学教授へのアプローチ（飯塚市本町商店街）

飯塚市本町商店街では、商店街が本来持つべきコミュニティ機能の低下に対する危機感から、このコミュニティ機能を高めるためには、商店街以外の“地域”との交流が必要と考え、その交流相手として市内の大学との連携を考えていました。

商工会議所が主催した、大学・学生が商店街を歩くイベント「商店街ツアー」で出会った経営学部の教授から、「地域ビジネスを研究する場所を探している」という発言に対して商店街振興組合が、商店街の空き店舗を活用して街なか研究室を設けてみてはどうかという提案を行ったことが連携のきっかけになりました。

●事例 15：中心市街地活性化の検討会議に参加していた大学教員を通じて連携が始まる（兵庫県尼崎市）

尼崎市では、商店街、まちづくり会社、市などによる中心市街地活性化の検討会議の中で、商店街での大学との連携事業を考案しました。同検討会議に委員として参加していた大学准教授の呼びかけにより、関西の5大学（関西大学・関西学院大学・流通科学大学・甲南大学・甲子園大学）のゼミが集まり、各々のプロジェクトがスタートしました。

●事例 16：行政の相談窓口が大学とマッチング（京都市竜馬通り商店街）

京都市竜馬通り商店街では、市などからの補助を受けながらファサード整備などの景観づくりを進めた後、ハード事業からソフト事業への転換を画策していました。商店街では何をして良いものか分からずにいた中、京都市役所に相談したところ、龍谷大学を紹介してもらったことが連携の始まりです。実は大学側も「小さくて元気のある商店街」を京都市に紹介してほしいとの要請をしており、京都市が仲介役としてマッチングが実現しました。

【相談窓口が増えてきています】

大学の使命として「地域貢献」が挙げられるようになってから、地域連携センターや産官学連携センターといった地域に開かれた相談・連携窓口機関を設けている大学が増加しており、これら相談・連携窓口では、連携にふさわしい教員などの紹介をしてもらうことができます。また、各大学の教員の研究テーマや社会・地域貢献活動内容を記載したホームページが設けられていることが多くなっています。これらの情報を踏まえ、連携を相談するアプローチ方法も考えられます。

その他、各自治体にあっても、地域づくり・まちづくりの担い手としての大学・学生の存在の重要性を認識しており、産官学連携の担当窓口を設けています。これら自治体窓口で相談を行い、大学とのマッチングを依頼するといった方法も考えられます。



STEP 4 商店街と大学・学生との良好な関係をつくる

商店街と大学の連携により効果を出すためには、学生と商店街との良好な関係をつくる必要があります。多くの連携事例から、学生との意見交換の場をつくったり、学生の居場所をつくる、イベントなどで頻繁に顔をあわせることなど学生に配慮していることがうかがえます。

【商店街と大学、学生との関係づくりの工夫】

●事例17：地域と学生との意見交換の機会からはじめる（品川区・目黒区西小山地区）

西小山地区での中央大学との連携は、地域の人々と学生との意見交換会をスタートとしています。“商売のヒントになるかもしれない”内容についての話し合いからはじめることで、地域も関心を示し、学生の率直な発言も貴重な意見として受け入れる基盤を作りました。

意見交換会の開催により、地域と学生との信頼関係がつけられ、その後の「ミステリーツアー（3頁参照）」は成功をおさめました。



西小山商店街での意見交換（ワークショップ）

●事例18：学生と頻繁に顔を合わせる

商店街にとって学生がどのように行動するのか、若者が何を考えているのか不安を持つのと一緒に、学生にとっても商店街がどのように受け入れてくれるのか不安を持っています。

学生と共同でのプロジェクト実施にあたっては、頻繁に顔をあわせる機会を作ること、時には酒を飲みながらお互いの話をするのが、良好な関係づくりには大切です。商店街の幹部だけが関係を持つのではなく、各個店と学生が知り合いになること、そのために各個店の店主が学生に積極的に声をかけてあげるなどのコミュニケーションの機会を多く作り出す配慮が効果的です。

●事例19：地域の大学、近い距離にある大学と連携することを重視する

普段は若い人が少なかった商店街に学生が居るだけでまちが賑わいます。イベントでの一時的な賑わいだけでなく、常に学生が居ることによる効果の大きさを考えると、大学はできるだけ地域と近いところにあることが望ましいと考えます。学生にとっては、交通費の支出も商店街へ足をはこぶ障壁になることから、歩いて通えるところにある商店街と大学との連携は理想的であるといえます。

●事例20：商店街と学生をつなぐコーディネーター役が必要

プロジェクトを実施する際、商店街ではリーダーが、大学では教員などが、お互いのメリットを考えながらプロジェクトを動かしています。商店街、大学それぞれに責任ある立場の方がいることで、商店街は大学による先進的な取組の実験を受け入れ、商店街を大学の研究フィールドとして提供できることになり、大学は教育・研究の一環として学生の活動を後押しすることができます。リーダーもしくは教員の役割として、商店街と学生との取組の中で何か問題があった場合に、調整をしたり、学生を守ってあげたりすることが取組の実践では大切です。

また、商店街と大学との継続した取組を実践できている事例では、まちづくり会社や行政等が両者のコーディネーターとして機能しています。尼崎市中心市街地では複数大学と複数商店街との連携をまちづくり会社を中心となってマッチングを行い、複数の共同研究として実現に至っています。また、行政は取組を施策に位置づけ、助成という形で資金的な支援を行うなど活動を支えています。

【大学、学生との連携にあたって配慮すべき事項（商店街の視点から）】

●事例２１：学生の居場所を商店街の中につくる（飯塚市本町商店街、尼崎市中心市街地）

飯塚市本町商店街では、学生をその都度商店街に呼ぶのではなく、商店街に居場所を作る、商店街に来ざるを得ない状況を作ろうと考え、商店街で空き店舗を借り上げ、街なか研究室を含む施設（飯塚 GENKI 館）をオープンしました。そこには、毎週多くの学生が通っており、当初は、ゼミ（授業）が終わるとそそくさと商店街から去っていた学生たちが、今では商店の人たちと話し、商店街での滞在時間が伸びています。

関西の 6 大学との連携を進めてきた尼崎市中心市街地でも、学生からの「居場所が欲しい」という言葉から、空き店舗を活用した学生の交流拠点を整備しました。学生が自分達の居場所として商店街を認識するようになり、商店街の人たちと学生が頻繁に声を掛け合う関係づくりに効果を上げました。（整備された拠点は、研究発表などの利用などを経て、現在は湯たんぽからソースまで地元産品を売るメイドインアマガサキショップ、託児所として商店街の一つの名所になっています。）



大学の街なか研究室が入居している「飯塚 GENKI 館」

●事例２２：“学生ならではの特徴”を理解する

まちづくりには、“よそ者”“ばか者”“わか者”が不可欠だと言われて久しいですが、その“よそ者”“わか者”（時には“ばか者”）でもある学生は、地域内でのしがらみがないことから、商店街に対して客観的な意見を出してくれます。それは、“遠慮のない率直な発言”であることもしばしばあるかもしれません。しかし、そのような発言もある程度覚悟して、“学生”であることの特徴を理解することも大切です。



学生が企画の段階から参加して開発した商品だからこそ、PR活動、イベントにも積極的に参加してもらえます

●事例２３：学生をマンパワーと考えると取組は続かない。

若い学生が大勢で商店街でのイベントを手伝ってくれることは賑わいづくりには非常に力になります。ただし、大学のねらいは教育、研究が中心にありますので、学生は商店街を賑やかすための“アルバイト”“マンパワー”として使うことは避けるべきです。

例えばイベントの場合、企画の段階から一緒に検討を行い、共同でプロジェクトを運営することで、学生の目的意識を高め、取組に対するモチベーションの維持・向上につながるとともに、学生自身の成長にもつながります。



まちづくり活動の最先端に挑戦した、大学との共同運営中の「ユビキタス戸越銀座ラボ」

●事例２４：研究者としての大学教員・学生に“わくわく感”と“達成感”を与える連携を考える。

大学教員や学生にとっては、商店街というフィールドで最先端に挑戦することの“わくわく感”が活動を続ける動機づけとなります。魅力ある個店の商売、商店街での特産品の開発など、商店街として他と差別化しようという志が、大学をひきつける魅力につながります。

また、開発した商品が数多く売れること、イベントに多くの来街者が参加、お客さんから笑顔もらえるなどの達成感を共有できる工夫を取り入れる必要があります。

●事例２５：商店街、大学・学生の役割・責任を明確にする。

商店街と大学・学生との連携の際、役割・責任の所在を曖昧にしたままスタートすると、“大学・学生はここまでやってくれるだろう”という商店街の考えと、“連携した取組を行うのだから、商店街はここまで責任をとるだろう”といった大学側の考えにギャップが生じて様々な問題を抱えることがあります。特に取組の費用負担などで問題が生じるケースが多く見られます。“まず連携する”ことが活性化のきっかけとなりますが、取組を行う中で、商店街、大学・学生それぞれの役割・費用面を含めた責任の所在を話し合い明確にしておくことが必要です。

STEP 5 大学・学生との連携から地域（商店街）の自立的な活動へつなげるために工夫する

大学・学生は、研究活動を行うのが主目的であり、商店街活動を永続的に行うことが目的ではありません。大学・学生との連携は、取組の“初動期”のみ行えると考え、将来的には地域（商店街）が自立的に活動を行っていくために工夫していくことが望まれます。

●事例 26：商店、地元住民、学生等を含む“まちづくり組織”の形成（つくば市北条商店街）

つくば市北条商店街では、商業者、地元住民、筑波大学生ら 130 人で「北条街づくり振興会」を発足し、商店街活性化を含めたまちの活性化事業に取り組んでおり、学生がいなくなったあとも、継続的、また発展的な事業展開につなげていけるように工夫しています。

●事例 27：LLP、NPO 立ち上げにより企画運営、資金確保（彦根市花しょうぶ通り商店街）

彦根市花しょうぶ通り商店街では、商業者・大学・行政関係者等が参加するまちづくり組織（LLP）を立ち上げて、活性化の取組を行っています。さらには、市内の NPO 法人が、連携取組の舵取りを行い、活動資金確保や調整、次なる取組の企画提案等を行っています。

NPO との連携によって、商店街での取組は同じ活性化策の繰り返しではなく、まちづくり組織（LLP）を中心としたキャラクターグッズの開発、まちの人が講師を務める講座の開講、学生が小学生に勉強を教える「学舎」など様々な展開につながっています。

●事例 28：活動資金を確保（横須賀市追浜商盛会）

活動資金の確保は、取組継続の重要なポイントです。横須賀市追浜商盛会（協同組合）では商店街でのワイナリーの経営によりワインの販売で収益を上げる仕組みをつくっています。さらに、持続的なワイナリー経営と商店街組合の本来の目的とが合致しないことから、新たに NPO を立ち上げてワイナリー経営、まちづくり活動全般を移管しています。NPO を設立することによって活動の賛同者を集めたり、補助金が受けやすくなったりして、資金確保を行う面で有利な状況になります。

●事例 29：大学・学生との連携で生まれたイベントのノウハウを、地域（商店街）が引き継ぐ（尼崎市中心市街地）

連携の当初は大学・学生が主体的に取り組んだ事業を、将来的には商店街が引き継ぐことをあらかじめ想定して進めることで、地域・商店街での自立的な活動につなげてきた例もあります。

尼崎の商店街では、2004 年からの甲南大学との連携により学生企画によるキャラクター「アマレンジャー」が生まれました。現在はアマレンジャーの企画における大学の役割は終わったものの、キャラクターは商店街が引き継ぎ、イベントなどで大活躍しています。また、同じ尼崎の三和市場での、関西学院大学の企画で行った地域の高齢者へのおせちづくりや店舗オリジナル商品づくりなどの取組では、大学との連携は教授の退官によりストップしても、活動は現在も続き、商店街・個店の魅力づくりの一端を担っています。

④ 最後に

本連携事例解説書で取り上げた事例について一覧を示します。

A 室蘭市輪西地区+室蘭工業大学

- ・てつのまちプロジェクト

I 京都市竜馬通り商店街+龍谷大学

- ・竜馬通り商店街振興組合

B 上山市十日町商店街+東北芸術工科大学

- ・東北芸術工科大学

URL <http://www.tuad.ac.jp/>

J 生駒市中心市街地+奈良女子大学

- ・生駒市商工会
- ・奈良女子大学 社会連携ページ

C つくば市北条商店街+筑波大学

- ・北条街づくり振興会 ・チームごじゃっぺ
- URL <http://www.tsukuba-hojo.jp/>
- ・筑波大学 ADP(Art Design Produce)

K 尼崎市+関西大学・関西学院大学・流通科学大学・甲南大学・甲子園大学・宝塚造形芸術大学

- ・TMO 尼崎
- URL <http://www.genki.or.jp/>

D 品川区戸越銀座商店街+立正大学

- ・戸越銀座商店街

URL <http://www.togoshiginza.jp/>

L 山口市西門前商店街+山口県立大学

- ・町屋再生事業については以下参照

E 品川区・目黒区西小山商店街+中央大学

- ・にぎわい再生プロジェクト研究会

M 飯塚市本町商店街+近畿大学九州短大・近畿大学

- ・特定非営利活動法人筑前国シュガーロード飯塚宿
- ※上記 NPO の HP に近大亭、おしゃべり放送局の取組が掲載されています。

F 横須賀市追浜商盛会+関東学院大学

- ・追浜商盛会

- ・特定非営利活動法人アクションおっぱま

G 須坂市中心市街地+信州大学

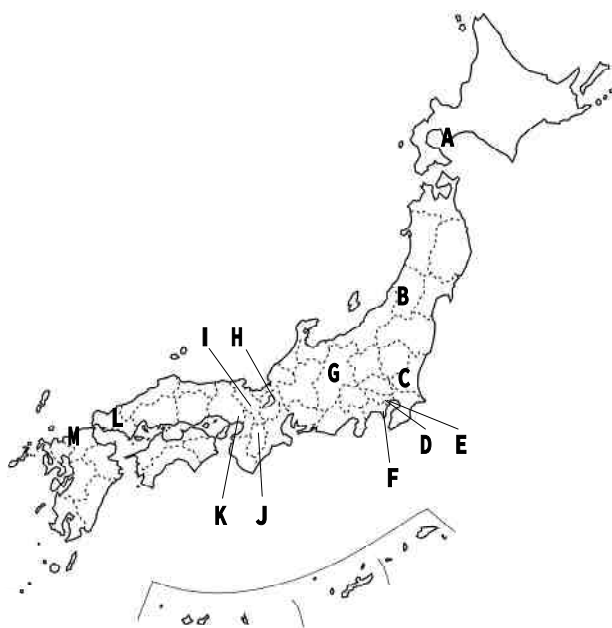
- ・須坂市産業振興部工業課
- ・信州大学・須坂市研究連携センター
- ・須坂商工会議所信州須坂ものづくりプロジェクト

H 彦根市花しょうぶ通り商店街

- +滋賀大学・滋賀県立大学・聖泉大学

- ・花しょうぶ通り商店街

URL <http://www.packet.ne.jp/hanasyoubu-st/>



セミナー事例 1 及び 2



＜戸越銀座商店街＞

立正大学が商店街に入ること、戸越銀座商店街の新名物「戸越銀座コロッケ」を生み出しました。大学による商圈調査、まちの実態調査のほか、マップ作成や包装用の箱・ノボリ等のデザイン、マスコミ等への働きかけ、コロッケ販売店舗のPR映像製作、月に一度開催される「銀六祭（商店街イベント）」では学生による手づくりコロッケの製作販売も実施しています。「戸越銀座コロッケ」の販売店は現在、商店街の11店舗に拡大しています。これら取組にあたり、学生と店主との信頼関係が作られていく中で、商店にとって学生からの新鮮な意見は取組の動機付けになっています。また、取組はメディアでも度々取り上げられ、商店街のプロモーション活動となっています。

＜西小山商店街＞

品川区と目黒区にまたがる西小山商店街は、これまで鉄道に分断され、合同での取組は皆無でした。鉄道の地下化により区をまたいだまちづくりが始まる中で、商店街と中央大学との連携がスタートし、学生の企画運営による商店街の活性化を考える「ワークショップ」、地域一体でのイベント「ミステリーツアー（謎解きをしながら街歩きを楽しむウォーキングイベント）」の取組を実施しました。区をまたがる初めての取組を盛り上げた学生の役割は大きく、ミステリーツアーの際には1700人が参加し、そのうち6割以上が商店街で買い物・飲食をするなど、販促としても成果をあげました。さらに、ワークショップでの学生と商店街・地域との話し合いを経て、商店街としても新たに地域全体での案内マップの作成を始めるなど連携の効果が現れています。



セミナー事例3



＜花しょうぶ通り商店街＞

二百年を超える伝統的商店や江戸時代の町屋、明治以降の近代化資産が点在し独特の雰囲気を持っている、彦根市内で最も歴史のある花しょうぶ通り商店街では、地元大学や学生と連携して身の丈にあった方法で商店街活性化に向けた取組を行っています。

滋賀大学・滋賀県立大学・聖泉大学の学生や近隣商店街など多様な団体と連携して開催する「アートフェスタ勝負市」は今年で10回目を迎えました。商店街内の250年前に寺子屋として使われていた空き店舗を「ひこね街の駅寺子屋力石」として、商店街版チャレンジショップの「カフェルワム」や滋賀大学・滋賀県立大学の「街なか研究室」に利用しています。また、定期的に開催し、まちの人たちが講師を務める「それぞれの彦根物語」や学生が小学生に勉強を教える「学舎」、陶芸教室など多彩なメニューが催されています。

持続可能な実行できる組織として、商店主だけでなく、地域外の人も加わった新しい組織 LLP（有限責任事業組合）の立ち上げも行い、「ひこにゃん」に続く地元キャラクター「しまさこにゃん」や「いしだみつにゃん」と合わせ、戦国商店街宣言をするなど、銭湯跡を改装した「戦国丸」にて戦国グッズの販売も行っています。



セミナー事例 4



《つくば市北条商店街》

2005 年、つくば市の主催ではじまったワーキンググループ活動による商店街活性化の検討をきっかけに、北条商店街と筑波大学の連携による数々の取組が進められてきました。

取組の一つ、「店蔵岩崎屋の改修」は、筑波大学大学院の建築デザインの授業「ADP (Art Design Produce)」にて行われました。「北条ふれあい館岩崎屋」として生まれ変わり、そこで開店したカフェは、学生と地域住民の共同運営により新たな交流の拠点となっています。また、かつてあった地域の朝市「北条市」の復活においても、会場の設置や屋台、グッズのデザイン・作成などで学生の感性や機動力が発揮されています。さらに、商店街にある江戸末期に建てられた穀物蔵を、ADP が中心となって改修し、「宮清大蔵」として蘇らせました。音楽コンサートを開催するなど、新たな商店街活性化の取組の場となっています。現在、ADP では元ふるいの製造販売であった町屋を改修し、そこで北条の子供達とのワークショップを重ねるなど、地域住民に開かれた場所づくりに取り組んでいます。

もう一つの学生グループとして「チームごじゃっぺ」があります。商店街の様々な取組に参加していた学生有志で立ち上げられたグループであり、その活動の一つには地元の「北条米」を使用したアイスクリーム「北条米(マイ)スクリーム」の商品開発があります。学生が主体となったこの取組は、マスコミにも取り上げられ、大きな反響を呼んでいます。

注目すべきは、これらの活動が商店街関係者、地域住民、大学生など130名の会員からなる「北条まちづくり振興会」によって運営されたことです。学生と連携した取組だけでなく、それらを支える組織づくりについても学んでいただきたい点です。

つくば市北条商店街案内マップ

- | | | | |
|----------------|--------------|-------------------|----------------------|
| 1 (有)後谷工務店 | 23 鳥長 | 45 エイトドライクリーニング | 67 (有)タキモト |
| 2 (株)杉田商事 | 24 喜沢はきもの店 | 46 御菓子司えびすや | 68 (株)関東つくば銀行 つくば北支店 |
| 3 (有)つくば納豆製造本舗 | 25 (株)イセバ | 47 小林酒店 | 69 高津量店 |
| 4 漆器修理店 | 26 北条自動車整備工場 | 48 深谷商店 | 70 小島理容所 |
| 5 魚鮓 | 27 (有)文洋堂 | 49 (株)常陽銀行 つくば北支店 | 71 栗山米穀店 |
| 6 生井酒店 | 28 ワカマツヤ電器店 | 50 弁慶 | 72 山田鮮魚店 |
| 7 堀田木工所 | 29 (有)とり文 | 51 若狭屋商店 | 73 いいじま洋品店 |
| 8 吉宇田塗装 | 30 泰記理容店 | 52 カフェボステン | 74 ヘア&フェイスサロンながせ |
| 9 フランク | 31 住谷ストアー | 53 大曾根屋米穀店 | 75 永瀬茶店 |
| 10 駅前クリーニング商会 | 32 山口洋品店 | 54 井上商店 | 76 よしや写真館 |
| 11 愛沢材木店 | 33 沢田支店 | 55 泉原製麺工場 | 77 サイクルショップマツザキ |
| 12 (株)ストウ | 34 モザイ | 56 エクレール料理 | 78 イムラ商店 |
| 13 ホワイティピア | 35 近江屋酒店 | 57 富田電機店 | 79 水谷石油店 |
| 14 井上石油(株)筑波SS | 36 広瀬筑波堂 | 58 橋本薬品 | 80 (株)山口信太郎商店 |
| 15 (有)オオクボ衣料 | 37 TSUKADAYA | 59 小沢石油 | 81 (有)高橋商店 |
| 16 北山不動産 | 38 つかたやはきもの店 | 60 野口屋 | 82 植松自動車(株) |
| 17 (有)金丸生花 | 39 (株)井上善兵衛 | 61 野口屋機械 | 83 (有)仲屋金物店 |
| 18 イナゲ時計店 | 40 坂人時計店 | 62 (株)オオウチ商事 | 84 岩瀬文具店 |
| 19 (有)イナゲ電器 | 41 近江屋茶舗 | 63 石田書店 | 85 (株)池嶋酒店 |
| 20 (有)福源タクシー | 42 宮本金物店(有) | 64 ヨシヤ | 86 池田印刷所 |
| 21 マルミヤ | 43 沢田本店 | 65 (有)広瀬機械店 | 87 源井機具店 |
| 22 興光化粧品店 | 44 佐藤タクシー(有) | 66 (有)宮川生花・造花店 | 88 (有)香月 |
| | | | 89 鈴木ガラス |

北条ふれあい館 岩崎屋

筑波大学との協働により、明治初期建築の店蔵を改修、地域活性化の拠点として利用しています。1階は筑波大学の学生が運営する「CAFE岩崎屋」となっており、北条米スクリーム等を販売しています。また2階では「ギャラリー日草」が運営されています。



ふれあい館から

宮清大蔵

かつては醤油の醸造販売をしていた老舗の商家、宮本家の店蔵。弘化4年(1847年)に建てられたと伝わる歴史的な建築物で、文化庁の登録有形文化財にもなっています。2008年に筑波大学大学院の建築デザインの授業(ADP)と国際学部のメンバー(チームごじゃっぺ)により改修され、ウィーンフィルのメンバーによるサロンコンサートを実施するなど、地域の拠点として生まれ変わりました。



ふるい

現在ADPにて改修に臨み始めている。元ふるいの製造販売所であった町屋を改修し、そこで北条の子供達とのワークショップを重ねるなど、地域住民に開かれた場所づくりに進めています。

